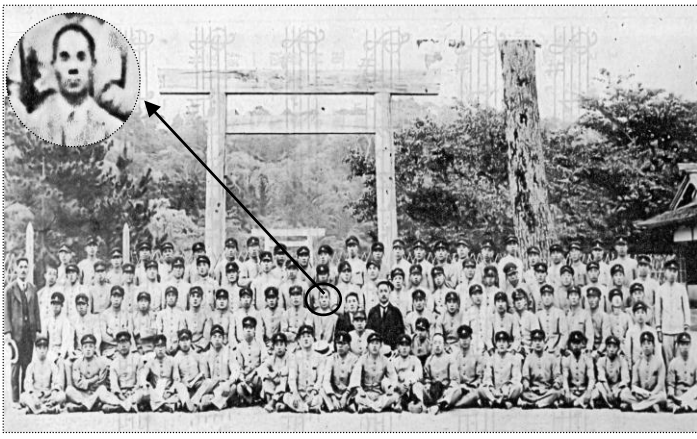




進修同窓会 HP にアクセス

第193号

2025 (令和7) 年10月14日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>



中27回生伊勢神宮外宮 火除橋前
写真左上の○は永山正先生

土浦中学校の修学旅行 6 関西旅行

土浦中学校の修学旅行は、1916 [大正5] 年度からは、関西方面に出掛けるようになり、土中生たちが待ち焦がれる行事となりました。

今号からその関西旅行について述べていきます。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。

なお、引用文中の【 】は筆者による注記です。

関西旅行始まる

土浦中学校の関西への修学旅行は、1916年度から始まりました。

この年、4年生(中17回)と5年生(中16回)とが合同で、4月27日から京都・大阪・奈良・伊勢を巡っています。

その行程は、1918年4月発行『進修第20号』『大正五年関西修学旅行記』によれば、次のとおりでした(…徒歩…鉄道)。

土浦(常磐線) 東京(1300) 東海道本線

京都(0400) 奈良線 伏見 伏見城址 恒武天皇陵 明治天皇桃山御陵 桃山(奈良線) 京都 十三間堂 豊国神社 方広寺 清水寺(昼食) 円山公園 知恩院 インクライン 銀閣寺 三条大橋

伏見屋旅館(泊) 伏見屋旅館 島津製作所 御所 仙洞御所大嘗宮 紫宸殿(大正天皇御大礼式場) 二条離宮(二条城) 御大礼饗宴場 北野天満宮(昼食) 金閣寺 仁和寺 太秦(嵐山電鉄) 嵐山 渡月橋 嵐山(嵐山電鉄) 四條大宮(京都市電) 河原町三条 伏見屋旅館(泊)



京都御所紫宸殿(大正天皇御大礼式場)

4/30

伏見屋旅館 河原町三条(京都市電) 京都駅 東本願寺 西本願寺 京都駅 東海道本線 梅田(現大阪駅) 造幣局(日曜日のため見学不可) 天満橋 大坂城 四天王寺 天王寺駅(関西本線) 1900 奈良 南都旅館(泊)

5/01

南都旅館 猿沢の池 春日大社 若草山 東大寺 興福寺 奈良(関西本線) 亀山(参宮線) 山田(現JR伊勢市駅)(泊)

5/02

宿 外宮 外宮前(伊勢電気鉄道) 内宮前 内宮 内宮前(伊勢電気鉄道) 二見 二見ヶ浦 二見浦(参宮線) 亀山(関西本線) 名古屋(東海道本線) 東京 自由行動 1400 上野(常磐線) 土浦

5/03

旅行費用は4円50銭。引率は沼田亀之介(理科・関根利三郎(武道・西尾頼造(国語)・児玉鹿三(数学)・小城彦熊(体育)の5先生。車中2泊を含めて計6泊7日。個人での長期旅行の機会が少なかった当時の中学生にとつては、大旅行でした。明治天皇陵の参拝、前年の11月に大正天皇の即位式が行われた京都御所御大礼式場の拝観が主な目的の一つでしたが、その後の旅行でも天皇・皇室関係の史蹟が随所に入っています。

その後は、1918年に、4年生(中19回)・5年生(中18回)が合同で実施し、1921年以降は、5年生の関西旅行、4年生以下の一日筑波登山が行われるようになり、「昭和4」年、1938年、1941年を除いては、年の聖地巡拝旅行まで、関西への修学旅行が続けられました。

関西旅行のあらまし

関西方面への修学旅行は、旅の機会が少なかったこの時代に、中学生にとつては最も楽しい行事となっていました。日程は、1916年に6泊7日で始まりましたが、1918年からは7泊8日が続き、1931年以降は

5泊6日となりました。1937年には6泊7日に戻っていますが、これは、1日目に鎌倉・横須賀の見学が、最終日に静岡・清水の見学が組み込まれたためです。1939年以降は、日中戦争の非常時下、4泊5日の日程で、主に皇室関係の史蹟を駆け足で巡っています。関西への行き帰りは、東海道本線の夜行列車を利用するのが殆どで、1940年の4泊5日も2泊が車中ですから、現代の弾丸ツアー並みの強行日程です。

行き先は京都・大阪・奈良・伊勢。年度によっては、滋賀の石山寺・三井寺(園城寺)・延暦寺、奈良の笠置山・吉野・神戸の湊川にも足を延ばしています。定宿は、京都三条の伏見屋旅館・いろは館、奈良三条通の敷島館、大阪道頓堀の稲田屋旅館・大日館、二見ヶ浦の松島館・紅葉屋旅館などでした。

永山正先生(社会 在職1925 [大正14] 年〜1965 [昭和40] 年)は、この関西旅行を『進修百年』の中で、「追憶」と題して次のように記しています。

「……行事の中で最も忘れられないのは修学旅行であろう。当校では五年生を対象として六月初旬に実施することになった。今日では旅行業者が一切スケジュールから旅館や鉄道の交渉をやってくれるので、付添い教師は生徒を掌握しておればよい楽なものだが、この当時は一切教師が計画も旅館、鉄道の交渉もやらなければならなかった。生徒にとつては勉強から解放されて羽根を伸ばす好機だったらしいが、教師の苦勞は大変なものだ。旅行に行つてくると一貫目(3.75kg)はやせるといわれる程であった。とにかく今日のようにバスなんかないので、京都でも大阪でも奈良でも伊勢でも汽車、電車のないところはすべて徒歩である。さすがの生徒達も旅行の終末に近づいたころは、口を利かなくなり帰りの夜行列車でみんな死んだようになり、はるくに寝ないで暑い昼間歩くのだからたまったものでない。中学二十七回生

の時には長南倉之助先生が引率責任者で物理の遠藤(川)又勇三郎先生、英語の南部泰先生と私が付添いだった。ちょうど前年(中二十六回生、奈良で本校生徒が宇都宮中学と甲府中学の喧嘩に巻き込まれた事件があったというので、この年は奈良は見学だけで畝傍に泊まることを余儀なくされた。二見ヶ浦と奈良三条通、大阪道頓堀、京都三条が宿泊地になっていた。……。」

大仏見ざるの記

永山先生が言うところの26回生の事件とは、¹⁹⁶⁷『昭和42』年発行『進修同窓会報第2号』『大仏見ざるの記』(中26回御園生根本雄三によれば次のような顛末でした。

「……自分にとつては『奈良東大寺の大仏さまは関西旅行の大きな目的の一つであった。長い日も暮れて芭蕉の『くたびれて宿借る頃や藤の花』ではないが、春の夕闇せまる奈良の宿に着いた。明日は見られる大仏さままで私の胸は大きくふくらんだ。しかしここで思いもかけぬ事態がおこった。



東大寺の大仏(盧舎那仏)(戦前)

夕食を済ませて仲良しのA君らとぶらりと宿を出て、いにしえの奈良の都の散歩としやれた。一、三の土産物屋を見たりして猿沢の池あたりまで歩き、大変よい気分となって宿へぶらぶらと帰って来た。消灯まではまだかなりの時間が

あるはずである。宿に着くと玄関先が妙に物々しく騒がしい。友達に聞くとわれら一行全部これから警察署に出頭する所であり、君等の帰りが遅いので心配していた所だという。まことに降って湧いたような話である。理由は無論わからない。そこでゾロゾロと一同列を作つて警察の門をくぐつた。広い部屋にギッシリと詰めこまれて長い間待たされた。われわれの外にもどこかの中学生が呼ばれて来ているらしい。その中一人一人が呼び出されて調べられた。いよいよ私の番が来た。君は級長だそうだが、今夜の様子を知っているだろう。詳しく話してみよという。詳しくにも何にも、夕食後ちよつと散歩して帰つたらこの騒ぎなので、その通りに話すより外に方法はない。やがて一同無事帰館を許されたが既に夜も白んで来る頃であった。後で聞く所によると、その夜学生同士が喧嘩をして、ちよつと通りかかった女の人が運悪く怪我をしたらしい。ところが喧嘩をしたその生徒達の服装がわが土中の小倉服【小倉服地の、綿織物の学生服】そっくりであったので疑いがわが一行にもかかったという訳であった。しかしわれわれの中には、この事件に関係のあるものがないことが知れて帰されたわけである。こうして願つてもなかなか出来ない警察に一夜を明かす仕儀と相なった。宿に帰り寝る間もなく朝食となつたが、その後急に奈良見学の予定を変更して、しばらく休憩の後、このまま奈良を発するという先生のお言葉。かくて残る汽笛に思いを残して、子供の頃から憧れの的であった大仏さまのすぐお膝元まで行きながら遂に拝顔の榮に浴することが出来なかつたのは、いかにも残念であった。

その後年移り昭和十六年、大学の医者となつて教授のお供をして名古屋の学会に出席し、その帰路奈良に廻り、中学生以来の念願であった奈良の大仏さまにとうとう拝顔した。しかしその時は既に最初のチャンスから十数年の歳月が

流れてしまつていた。……。

それにしても英語の神戸次郎先生がよくおつしやつた。『チャンスというやつは、君、前髪はあるが後ろは丸禿だから、一度逃げるとなかなかつかまえないよ。』と勿論これは西洋の有名な諺である。

昔の級友達と今一度関西旅行がしてみたいものだ。母校の発展を祈る。」

この中26回生たちの「関西旅行記」は、¹⁹²⁷年1月発行『進修第25号』に掲載されていますが、『進修』は、生徒会誌といえ、学校の公的な刊行物であるためか、警察での取り調べなど、事件のことは書かれていません。しかし、第6日の記録を担当した御園生は、奈良への憧れを綴りながら、その諦め切れない思いと悔しさを吐露しています。

「第六日」

五乙 根本雄三

奈良の都それは私が幼い頃からあこがれて居た都です。それは『古の奈良の都の八重桜今日九重に匂ひぬるかな』と云ふ歌をまだ小さかつた私が大人にまじつて百人一首で得意がつて取る頃からでした。私が小学校を終へて色々の事で春日神社若草山二月堂三月堂又は優しい鹿の群、それらについての雑然とした少しばかりの智識を得、又は名家の奈良礼讃と云ふやうなものを読む度に美しい都寂びた都と云ふ感じが益々濃くなつて行きました。

私達が大きな期待を以てこの都を訪れた日それは輝かしい空の、初夏の日でした。朝飯を食べた後、私は二三の友と一緒にぶらりと宿を出ました。朝日が道路の打水に美しく光つて居ました。数日来的の慌ただしい旅行気分にはひきかへてなんとまあそこは静かなそして寂びた町でしたらう。それはあまりに私の慌ただしい気分とかけ離れて居て、私は今予ねてから憧憬して居る奈良の都に居るのだと云ふ感じがしつくりと私の胸に感じられませんでした。

纏【まとまり】のつかないそれで居て

何にか幸福なやうな茫然とした気持で私は奈良の町を歩きました。横町の細い道から鹿が二匹伴れ立つて来ました。

別に急がうと云ふ風もなく如何にも人馴れた様子で往來を揺々と歩いて居ました。優しい目でした。常に幸福な微笑を洩して居て可愛いものでした。奈良の都只そう云つただけでも優しい感じがします。美しいものの持つ淋しさ、栄えたものゝ受ける悩みそんなやうな気分が色濃くも奈良の町には浸みとほつて居るやうな気がしました。時間が少なかったのでも又後でと思つて少しばかり土産物を買つて宿へ帰りました。宿へ帰るとすぐ昨夜の事で予定が非常に遅れたので奈良の見物は中止してすぐ二見ヶ浦へ出発すると云ふ事でした。あゝ何んと云ふ不幸な事でしたらう。揚々尋ねて来てこのまゝ帰つて了ふのかと思ふと残念でたまひませんでした。

停車場へついてせめてと思つて後を振り返つて見るとこの度はぬさも取りあへずの山向山や三笠山の内やかな【ひそやかな】姿がはるか霞の中にねむつて居りました。『三笠の山に出でし月かも』とその昔異郷の空で阿部仲麻呂の故郷を慕つて泣いたのはあの山か東大寺、二月堂、三月堂とは何処の辺りだらうなど色々思ひました。到頭汽車が来ました。乗降の客のやかましい足音や物売りの声も一頻り止んでしまふとやがて駅長の笛がピリピリと鳴りました。ゴトリと一つ大きく揺れて汽車は動き出しました。あゝ奈良よ！若草山よ！鹿よ！私がお前たちを尋ねて来るまで。それはいつの事だかわからないがどうぞその時まで皆んな無事であつて呉れ。では奈良よ、さよなら、私は妙に感傷的な感じに成つて悲しく思ひました。かうして私達の奈良訪問は只チツトその横顔を見たに過ぎませんでした。不幸なものでした。……。」